九月前侯前田重教監國の事に任じ、好禮及び池田正信の財政策を採用して之を厚遇したのであつたが、六年重教の卒後、好禮の處置宜しくなかつたとの理由により、八月廿七日大坂に於いて捕へられ、九月十日金澤の獄に投じ、七年四月廿七日五ヶ山流刑を命ぜられ、十二月その地に赴いたが、その時好禮は四十一歳であつた。文政四年赦に値うて歸り、六年四月七日七十七歳を以て歿。好禮字は苟美・號は春郭。能く學に通じ、詩に巧に、その配所にありて論語餘補四卷・政則十卷を著した。

トミタリユウ　富田流　トダ　→トミタカゲマサ　富田景政。

トミタロクエモン　富田六右衞門　初めて前田利家に仕へた。子孫藩に世襲する。

トミヅ　戸水　石川郡大野庄に屬する部落。龜尾記に、この村領に江尻掃部といふ郷士の屋敷跡があると記する。

トミヅカ　富塚　江沼郡能美境に屬する部落。古墳があるので邑名となつた。

トミヅカ　富塚　江沼郡富塚に在る古墳である。茇憩紀聞に『此の村に大塚有り。土民石槨を掘出す事あり。中に鎧或は太刀の折、差渡三歩許の金環、瑠璃の緒〆の如き玉數多あり。官府に相達、追て又埋置く。今その所に印の石有。』とあり、里人は之を富森長者の塚と言うて居る。八米に一二米許の丸塚である。

トミヅカショウ　富墓庄　江沼郡に在つた。菅家長者記文暦二年八月廿三日大學頭前長門守の文書に『加賀國富墓庄號柴山庄。件庄者自古無主荒廢之地也。然依有仁者樂山之因緣、申請宣旨令施入神領、永爲法華八講領云々。』とあつて、富墓庄はまた柴山庄とも號したと見え、本文はそれを北野天滿宮に寄進したのである。又永享三年十月の室町家内書案にも、『松梅院禪能知行分加賀富墓・福田兩莊云々』とあり、蔭涼軒日錄長祿二年には、柴山孫衞門新寄進加賀國富墓庄百斛が雲澤軒領となつたことが記されてゐる。

トミヅキ　富突　寛延三年四月藩吏青地彌四郎藩宣が年寄奥村修古に提出した稟請書に、近時能登の幕府領及び富山藩に富突の流行を來し、加賀藩の庶民も之を買入れる者あり、寺社に於いても亦その賣買を周旋するものがあるから、自今凡べて之を禁止したいと言うて居る。之に因つて略富突の加賀藩に起らんとする時期を察し得る。次いで寶暦十年には、江沼郡山中醫王寺が大聖寺藩の免許を得て之を行ひ、加賀藩でも小松梅林院・金澤觀音院に於いて私かに之を主催したを初とし、明和元年正月六日前田孝昌の御用番であつた時、石川郡佐那武社・金澤神明社・鹿島郡石動山天平寺などが主催の許可を得てから、初めて公行の風を馴致した。かくてその弊漸く甚だしかつたので、三年六月藩が富突を禁止せねば、藩侯の歸國を待つて八十二人の者が生命を捨てるであらうと記した訴狀を街路に遺棄したものがあり、幕府も亦四年八月博奕・三笠附・取退無盡と共に富突を嚴禁するとの命を發し、九月晦日老臣本多政行・前田孝昌は之を領内に傳達した。しかもその餘弊尙止まず、萬人講等の名を以て催したものが少くなかつた。藩政の末期に及んでは、富突再び大に行はれ、公共の費用を補充する方法としてこれを利用したものすらある。石川郡鶴來町及び松任町等はそれで、天保以降橋梁の修築、社寺の再興、窮民の救濟等の爲巨資を要する際、藩の免許を得て富突を公開した。富突は又富籤とも言はれた。

トミヅコウ　戸水弘　通稱喜四郎、字は元毅、侗齋又は北湖と號した。米右衞門の二子。米右衞門初め本多氏に仕へたが、事に因つて處士となり、弘の生後幾くもなく歿した。弘乃ち貧窮に育せられ、弱冠にして町奉行松尾榮富に仕へ、榮富の退隱するやその子榮庸に歷仕したが、この間中島石浦に學を受け、遂に大成するに至つたので、自ら帷を下して諸生に教授すること多年に及び、天保二年三月藩からその篤實謹行を賞して白銀拾枚を與へられ、三年四月本多播磨守政和に召されて儒臣となり、五年六月十一日七十四歳を以て歿した。

トミヅゴクデン　戸水極田　萬治四年三月石川郡倉月郷用水下の邑民の連署狀に、『戸水極田村・大友村』と載せたる極田は御供田で、今は大友御供田と呼ぶものである。恐らくは白山比咩神社の御供田があつた所であらう。

トミヅミホ　富積保　白山宮莊嚴講中記錄天福二年八月十九日に富積保靜眞堅者があり、萬壽禪寺記に『正和元年院宣、加州富積保爲祈禱賜之。』とあり、天文日記天文五年三月十四日の條に、加州富積（トミヅ）の七郎右衞門がある。又天文日記附錄加州本家謂付日記にも、南禪寺内瑞雲軒領の中に富積保西方五町七段とある。富積保は石川郡に戸水村のあるのがその遺で、富積の文字が煩雜である爲に變じたものであらう。

トミヅヤリユウカイ　富津屋立介　金澤の俳人。年風に學んで暮柳舍六代を繼席した。富津屋はもと島屋と稱し、袋町に住して米仲買を業とし、通稱を善助というた。天保十四年八月六日四十歳を以て歿。

トミナガイエモン　富永伊右衞門　初め勝左衞門。惣兵衞助秀の子。領百五十石。御馬廻組に屬したが、天明元年九月十六日從弟福岡判太夫と喧嘩して死し、家斷絶した。

トミナガウマノスケ　富永右馬助　前田利長に仕へて二百五十石を受けた。子孫藩に世襲する。

トミナガショウ　富永庄　康正二年造内裏段錢並國役引付に『拾貫文、富永莊、江州山門領段錢』と見えて、延暦寺領であつた。この富永莊は石川郡富永御厨のあつた地であらう。

トミナガスケノブ　富永助信　通稱勘解由左衞門。文祿二年前田利長に仕へて二千俵を受け、慶長四年又二千俵を加へ、同年俵數を知行に引直して二千石とせられたが、その中千石を兄猪俣能登守の嫡子平六に分かち、勘解由左衞門は五百石の加增を得て千五百石を領した。次いで大坂陣に旗奉行を勤め、元和五年六月歿。子孫藩に世襲する。

トミナガスケモリ　富永助盛　通稱權之助・勘解由左衞門。父は勘解由左衞門助信。助盛慶長十一年八月前田利長に仕へて小々將となり、百五十石を領し、元和五年十月父の遺知千五百石を襲いで前祿を除かれ、御馬廻頭・金澤町奉行等に歷任し、萬治二年致仕して休候と號し、料三百石を受け、寛文三年十一月